

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2013.12) 平成24年度:5～10.

一般病棟におけるエンゼルケアを行う看護師の思い

清水優 瀬川澄子

I. 目的

「エンゼルケア」としての呼び名の変化、家族とともに実施することで家族や看護師のグリーフケアへとつながっているという報告が多くされている。臨終期のケアを「死後処置」として行っていたが、3年前に部署内でエンゼルケアの伝達講習を実施した。エンゼルケアとして実践している看護師の思いを明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究対象：部署内のエンゼルケア伝達講習を受けた卒後3年の看護師4名。
2. 調査方法：独自の質問項目を作成し、半構成的面接を実施した。
3. 分析方法：面接で得られた逐語録から意味・類似性に従い、コード・カテゴリー化した。

III. 倫理的配慮

本研究の趣旨、プライバシーの保護について説明し、同意を得た。

IV. 結果

「」内にコード、〈〉内にサブカテゴリー、【】内に主要カテゴリーを示す。

伝達講習直後は「声をかけるタイミングがわからなかった」「どう声をかけていいのかわからなかった」と〈エンゼルケアへの戸惑い〉があった。しかし、エンゼルケアで、「眠るような穏やかな顔」と〈外見的な印象の変化〉を感じ、「実はこういう人だった」と〈家族と患者を振り返る〉時間が持て、「振り返る時間で家族をねぎらうことができる」と〈家族の頑張りを認める〉時間を持つことができ、「この時間を大切にしたい」と〈経験を重ねることでエンゼルケアへの思いの変化〉をもたらしていた。「ケアに入ることで気持ちが落ち着いた」「泣いていたご家族が笑顔になった」と看護師、家族にとって〈グリーフケアとなっている実感〉を持ち、「暖かい空気感を感じた」「エンゼルケアは自然にタッチングができる」と〈エンゼルケアの評価〉を看護師自身で行っていた。「いつも通りの顔でした」「きれいだね」と〈家族からの評価〉を得ることで最期までケアができていた自信を得ていた。エンゼルケア導入前は「最期の見栄えのためだけにやる」〈処置としての臨終期ケア〉を振り返り、「普通だと思ってやっていたが違うと思った」と今までの〈死後処置への違和感〉を感じ、「もっとケアできた」「声かけできずに帰っていた時間がおしかった」と〈ケアや家族との関わりができなかった死後処置へのジレンマ〉を表出し、「振り返れる時間

を大事にしたい」「生前の面影を残したい」と〈自分の看護観〉を見出していた。【死後処置からエンゼルケアへの意識変化で自分の看護観を見出す】こととなっていた。

医師からの段階的な説明を受けていることで「最期に家族が頑張ったねと言っている場面が多い」と〈家族が患者の死を受容できる準備が整っている〉ことで穏やかなエンゼルケアへとつながっている。エンゼルケア時に「生前の関わりが活かされる」と〈ターミナル期から継続された看護の重要性〉を実感し、「質の高いエンゼルケアを行っていくのに生前の関わりをもっと大事にしたい」と〈ターミナル期からの看護を見直すきっかけ〉となっていた。【ターミナル期から継続されている看護を実感】し、今後の看護への学びと

V. 考察

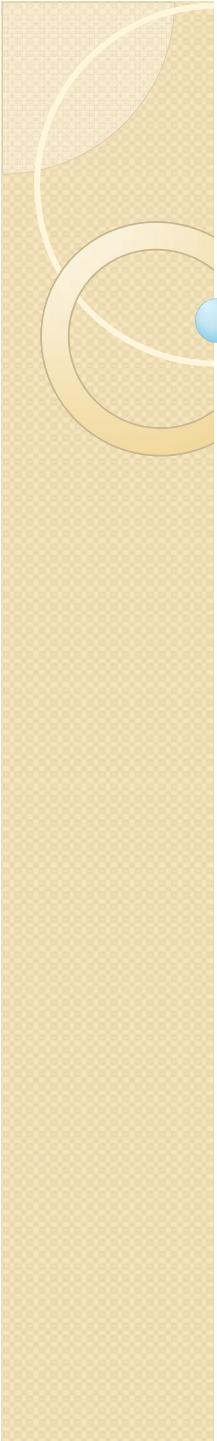
死後処置として患者の死後慣例的に行ってきたものであったが、エンゼルケアとして臨終期のケアを捉え、経験を重ねることでグリーフケアとなっていることを実感できた。処置として行ってきたことを振り返り、ケアとして行える部分が見出され、体験や経験によって自身の看護観が構築されていったと考える。小林¹⁾は「臨終に至るまでの家族との関係性の構築が重要である。」と述べているように消化器外科病棟では進行癌における治療経過の中で、終焉を迎えることも多い。その治療経過の中で患者の個人史を肯定的に捉え、発達段階を意識した関わりを行い、家族との関係性を構築していくために家族との関わりを意識的に行っていく必要がある。エンゼルケアだけを考えるのではなく、ターミナル期から継続して看護を行うことで、よりよい臨終期のケアへとつながっていくと考える。

VI. 結論

1. 一般病棟におけるエンゼルケアを行う看護師の思いは、【死後の処置からエンゼルケアへの意識変化で自分の看護観を見出す】【ターミナル期から継続された看護を実感】の2つの主要カテゴリーが抽出された。
2. 看護師は、よりよい臨終期のケアをするために、ターミナル期の看護を深めていく必要がある。

引用文献

- 1) 小林光恵：改訂版ケアとしての死化粧、日本看護協会出版会、2007



一般病棟における エンゼルケアを行う 看護師の思い

旭川医科大学病院
○清水優 瀬川澄子

I . 研究目的

臨終期のケアを「死後処置」から
「エンゼルケア」として
実践している看護師の思いを
明らかにする。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究対象

部署内のエンゼルケア伝達講習を受けた卒後3年目の看護師4名。

2. 調査方法

独自の質問項目を作成し、半構成的面接を行った。
面接内容を逐語録に録音した。



3. 分析方法

**面接内容を意味・類似性に従い、
一文一意味をコード化し、
カテゴリー化した。**

**カテゴリーから主要カテゴリーを
抽出した。**

伝達講習の内容

- エンゼルケアの定義
- 身体の変化について
- ならわしで行っていたケア
- 末期の水
- シャワー浴・アロマ清拭
- エンゼルメイクの定義・方法



Ⅲ. 倫理的配慮

本研究の趣旨、プライバシーの保護について説明し、同意を得た。

IV. 結果

- 面接時間：平均50分
- 得られたデータは、
91のコード、15のサブカテゴリー、
主要カテゴリーを2つ見出した。

サブカテゴリー	コード
エンゼルケアへの戸惑い	*声をかけるタイミングがわからなかった *どう声をかけていいのかわからなかった
外見的な印象の変化	*眠るような穏やかな顔 *優しい表情になった
家族と患者を振り返る	*実はこういう人だった *髭にはこだわりがある人だった
家族の頑張りを認める	*振り返る時間で家族をねぎらうことができる *支えてきた家族に声をかける時間がある

サブカテゴリー	コード
経験を重ねることで エンゼルへの 思いの変化	*この時間を大切にしたい *最後までケアをしている実感 *最期のイメージをよくしたい
グリーンケアと なっている実感	*ケアに入ることでの気持ちが 落ち着いた *泣いていた家族が笑顔に なった
エンゼルケアの 評価	*暖かい空気感を感じた *エンゼルケアは自然に タッチングができる
家族からの評価	*いつも通りの顔でした *きれいだね

サブカテゴリー	コード
<p>処置としての 臨終期ケア</p>	<ul style="list-style-type: none"> *最後の見栄えのためだけにやる *亡くなってただ見送っている感じがしていた
<p>死後処置への 違和感</p>	<ul style="list-style-type: none"> *普通だと思っていたが違うと思った *家族が患者と別々に過ごしている時間が長かった
<p>ケアや家族との 関わりができなかった 死後処置へのジレンマ</p>	<ul style="list-style-type: none"> *もっとケアできた *声かけできずに帰っていた時間がおしかった
<p>自分の看護観</p>	<ul style="list-style-type: none"> *振り返れる時間を大事にしたい *生前の面影を残したい
	<ul style="list-style-type: none"> *家族をねぎらう時間にしたい

カテゴリー1

死後処置からエンゼルケアへの
意識変化で自分の看護観を見出す

サブカテゴリー	コード
<p>家族が患者の死を受容できる準備が整っている</p>	<ul style="list-style-type: none"> *最後に家族が頑張ったねと言っている場面が多い *何も悔いを残すことはないと言っていた
<p>ターミナル期から継続された看護の重要性</p>	<ul style="list-style-type: none"> *生前の関わりが活かされる *段階的に関わることで関係性ができた
<p>ターミナル期からの看護を見直すきっかけ</p>	<ul style="list-style-type: none"> *質の高いエンゼルケアを行っていくのに生前の関わりをもっと大事にしたい *家族が付き添っているときに関わって声をかけれる時間がある

カテゴリー2

ターミナル期から継続されている
看護を実感

V. 考察

1. 死後処置からエンゼルケアへの意識変化で自分の看護観を見出す



V. 考察

2. ターミナル期から継続されている看護を実感

VI. 結論

1. 一般病棟におけるエンゼルケアを行う看護師の思いは、

【死後の処置からエンゼルケアへの意識変化で自分の看護観を見出す】

【ターミナル期から継続された
看護を実感】

の2つの主要カテゴリーを見出した。

VI. 結論

2. 看護師はよりよい臨終期のケアをするために、ターミナル期の看護を深めていく必要がある。

引用文献

小林光恵

改訂版ケアとしての死化粧、
日本看護協会出版会、2007